

「あの、お婆様、ちょっとよろしいですか？」

「なんだい？ 改まって」

ある日、高等魔法学院が終わって俺の家に寄ったシシリーが、家に着くなりばあちゃんに話しかけた。

「実は、お父様からお願いがあって……」

「アンタの父親から？」

「セシルさんから？ なんだろう。」

「いつも私がこちらの家にお邪魔しているので、たまにはシン君と夕食を取りたいと言っているんです」

ああ、そういえばそうか。

最近、シシリーは自分の家では朝食しか食べていない。

昼食は学院の学食だし、夕食はウチで食べている。

なので、最近のクロード家の夕食はセシルさんとアイリーンさんの二人きりになってしまっている。

「お母様も、最近お父様とお兄様との三人だけの食事ではなく、たまには大勢で賑やかに食事したいと言っていますし」

……お義兄さんのロイスさんを完全に忘れていました。

そういえば、ウオルフォード商会の代表になってもらってから、実家に戻ったと言っていたな。

「どうでしょうか？」

「いいじゃないか。式を挙げてしまえばクロード家とは親戚になるんだ。今から交流を深めておくことに異論はないよ」

「ありがとうございます。それでは、早速今日の夕食でいいですか？ お父様のお仕事の関係上、今日を逃すとしばらく後になるそうなので」

「ああいいよ。なら早めに言っておいた方がいいんじゃないかい？」

「分かりました。それではちよつと行ってきます」

シシリーはそう言うと、自分でゲートを開いて家に帰って行った。

それにしてもな……。

「シシリー、じいちゃんには一言も聞かなかったね……」

「ほっほ……それで話が完結するところが悲しいのお……」

ずつとばあちゃんの隣にいたのに、一向に話を振られなかった爺さんが憐れだった……

…。

世間的には、ばあちゃんより爺さんの方が知名度も人気もあるのに、家の中ではその地位の低さに目頭が熱くなる。

そんな爺さんに同情しているとゲートが開き、シシリーが戻って来た。

「お母様に話してきました。あ！ マリーカさんとコレルさんにも伝えないと！」

マリーカさんはウチのメイド長で、コレルさんは料理長だ。

最近、ウォルフォード家の若奥様としてウチに来ているシシリーは、使用人さん達と非常に仲がいい。

そして、しばらくマリーカさんやコレルさん達と話をしていたシシリーが戻ってくる
と、ばあちゃんがシシリーに向かって言った。

「ああ、アタシらは行かないからね。シンだけ行つといで」

「ええ！？ どうしてですか？」

「自分で言うのもなんだけど、こう見えてアタシらはそこそ有名な訳さ」

「本当に自分で言うのはなんだね」

「お黙り！ そんな人間がいるとねえ、楽しいものも楽しめなくなるじゃないか。そんな遠慮はさせたくないからね」

「そうじゃのお。周りが緊張しておると、自分らがそうさせておるのかと居たたまれない気持ちになるからのお」

「そういう訳さ。だから、クロード家に行くのはシンだけにしな」

そういえば、爺さんとばあちゃんが英雄として扱われるようになったのは大分昔の話だ。

今までにもこういうことが一杯あったんだろうな。

その実体験から、今回は遠慮したという訳か。

「そう…：ですか。分かりました。あ！ もう一度マリーカさん達に話してこないと。

ああ！ そういえばウチにも言っておかないと！」

恐らく、クロード家の方には俺と爺さん、ばあちゃんが来ると言ってしまったんだろうな。

そしてウォルフォード家では、三人ともいなくなるので食事の準備はいいと言ってしまったんだろう。

シシリーが慌てて手配しなおし、ある程度の時間になったところで、クロード家に移動した。

「あら、いらっしやいシン君」

「お邪魔しますアイリーンさん」

クロード家に着いた時に出迎えてくれたのは、義母になるアイリーンさんだ。

相変わず、四人も子供を産んだとは思えないほど綺麗な人だ。

「そういえばシン君、夕食だけでなく、ウチで食事をするのって初めてじゃない？」

「そういえばそうですね」

「もう、シシリーを嫁に出したんだからシン君は私の息子なのよ？　いつでも遊びに来ていいのに」

「はあ、すみませ……え？」

「あの……まだ出てません……」

あまりに自然に言われたので、うっかり返事しそうになったけど、シシリーの言う通り、まだ嫁には来ていない。

「あら、そうだったわね。もうすっかりそのつもりだったわ」

うふと笑っているけど、あれ絶対ワザとだ。

アイリーンさんからかわれて、シシリーが真っ赤になっていた時、ある訪問者が現れた。

「あ、もう来てるじゃない」

「本当ですわ。もう、お兄様がモタモタしているからシン君が来てしまったじゃないですか」

「ぼ、僕のせいかな！？」

シシリーの姉であるセシリアさんとシルビアさん。

それと、長兄でウオルフォード商会の代表ももらっているロイスさんの三人だ。

「あれ？　お姉様？」

同居しているロイスさんはともかく、セシリアさんとシルビアさんの訪問は意外だったらしく、シシリーも首を傾げていた。

するとその様子を見たセシリアさんが説明してくれた。

「私達、仕事の帰りにウオルフォード商会に寄ったのよ。そしたら、まだ営業中なのにロイス兄さんが帰ろうとしてたからね。捕まえて事情を聞いたのよ」

「そ、そうだったんですか」

「今日はシン君が家に来るって、お兄様がさっさと教えてくれないから遅くなっちゃいましたわ」

捕まえたとかさっさと教えろとか……相変わず妹に邪険に扱われてるなあロイスさん。

「申し訳ありません『会長』。騒がしくなっちゃって……」

「別にいいですけど……プライベートで『会長』は止めましょうよ。今日は前の通り『義弟』として接してください」

「そうかい？ いやあ、最近は会長としてのシン君としか接していなかったから、なんともむず痒い感じがするね」

一応、商会では俺が会長で、ロイスさんが専務。

他の社員の目もあるから、俺が商会に顔を出すときはロイスさんは俺の事を会長として扱ってくれる。

最初はなんとも言えない気持ちになっていたけど、最近はそれにも慣れてきた。慣れてきた頃にまた逆戻りな訳だから、そりゃ複雑な心境になるだろうな。

俺の方は、一応肩書は会長で、俺の商会ということになっているけど、商会を運営しているのは俺より全然年上の人達ばかり。

なので俺が皆さんに敬語で話していても、特に違和感を感じていない。ちなみに、社長はアリスのお父さんのグレンさんだ。

「ホラホラ、シン君もロイスも、家でお仕事の話はしないのよ？」

「あ、すみません」

「分かってるよ母さん。ところで、言い出しっぺの父さんは？」

そういえば、義父のセシルさんがまだ帰って来ていない。

ロイスさん達がこの時間に集まっているということは、大抵この時間には帰っているのだろう。

俺がクロード家に来ることをロイスさんが知っていたように、シシリーがクロード家に報告してからすぐに使いの人が連絡に行っているので、俺が来ることをセシルさんが知らないということはないだろう。

そんな話をしていると、玄関が開き、セシルさんが帰ってきた。

一人客を連れて。

「た、ただいま……」

「ウム、お邪魔するよ」

「デイスおじさん！？」

その客は、アールスハイド王国国王、デイスおじさんだった。

「へ、陛下！？」

その突然の登場に、俺とシシリーとセシルさん以外の全員がデイスおじさんに向かって膝を付き首を垂れる。

……っというか……。

「なにしてんの？」

「ん？ おお、なにシン君が初めてクロード家の皆と食事をすると言うのな。様子を見に来たのだ」

あっはっはと笑っているデイスおじさんにイラっとした俺は、無言でゲートを開いた。

「あれ？　なんでゲート？」

「向こうで説教受けてきて」

「え？」

俺はそう言って、デイスおじさんをゲートの向こうに突き飛ばした。

「え？　メリダ師？」

「ばあちゃん！　デイスおじさんが乱入してきたんだ！　説教してあげて！」

「なんだって！？　本当かいディセウム！！」

「え、ちよ、ちよっと待っ……」

「いいからそこに座りな！！」

ばあちゃんの怒声を聞きながら、俺はゲートを閉じた。

ふう。

まったくあのオッサンは。

ちよっと面白そうだと思ったら、すぐに首を突っ込んできやがる。

本当にオーグと似てるよなあ。

そんなことを想いながら振り向いた先にあったのは、シシリーの困り顔とそれ以外の人の驚愕の顔だった。

「シ、シン君……その……いいのかい？」

「何がです？」

皆を代表してなのか、セシルさんが俺に質問してきたけど、主語が無いから何がいいのか分からない。

「だって、その……陛下だよ？」

「へい……ああ、そっか。デイスおじさん国王様だっけ」

最近、家でゴロゴロしているところしか見てないからすっかり忘れていた。

「あ、あはは……私も一瞬忘れてしまっていました」

そういえば、さっきシシリーも膝付いてなかったな。

「シ、シシリーまで」

シシリーが国王に敬意を払わなかったことに驚愕したのだろう、セシリアさんが目を見開いていた。

「だ、だって、シン君のお家にいる時の叔父さま……じゃなかった陛下は、本当に親戚の叔父様みたいなんです……」

「まあ、ウォルフオード家ではデイスおじさんの扱いなんてあんなもんです。今頃、ばあちゃんにこってり絞られてると思いますよ」

あ、そういえば、玄關から来たってことは、表にデイスおじさんを乗せてきた馬車が止まってる筈だ。

後でウチにすることを教えてあげないと。

「シシリィがシン君と婚約してから、信じられないことばかり起きるわね……」

「私も思っていましたわ」

「さ、さあさあ、お父様も帰って来たことだし、夕食を始めましょう！」

セシリアさんとシルビアさんの眩きを聞かない振りをしたアイリーンさんが、強引に夕食の開始を宣言した。

そして、夕食が開始されたのだが……。

「それで？ あの本に書かれていること以外でどんなことがあったのか、お姉さんに教えなさいな」

「そうです。私達は姉として真実をしる義務があります！」

「え、ええ？」

夕食中、セシリアさんとシルビアさんの二人は、ずっと俺とシシリィの話を書きながら、書かれていないことについて言うと、ほぼ全部になっちゃうんだよね……。

「い、言えませんか！」

その事をシシリィも理解したのか、顔を赤くして姉二人の要求を拒否した。シシリィを溺愛している二人であるなら、拒否されたことを悲しむのが普通だろう。

だがその拒否の仕方が、赤くなって本に載せられないことの申告拒否。

これは誤解されても仕方がない。

「そんなに赤くなって言いたくないということは……」

「まさか！ シシリィ貴女！ 私達より先に大人の階段をのぼ……」

「セシリア、シルビア……親の前でそういう話はしないでくれないかい？」

「「あ、ごめんなさい」」

案の定、そう言う風に誤解したセシリアさんとシルビアさん。

その話を続けようとしたところにセシルさんからのストップがかかった。

ふう……危なかったぜ。

実際そういうことはしていないけど、色々といチャイチャはしてるからな。

シシリィが一体何を暴露してしまうのか気が気でなかった。

言葉に出してお礼を言うとか変な感じになりそうなので内心でセシルさんに感謝する。

すると、追及が止んでホッとして喉が渴いたのだろう。

目の前にあったグラスの中身を一気に飲み干した。

……あれ？　そういえば、ここにあったグラスって……。

シシリーが飲み干した後に置いたグラスを手に取り、グラスの中の匂いを確認してみると……。

「あ、やっぱりコレ、お酒だ」

普段からお酒を呑まないシシリーは今日もジュースだったのだが、そのジュースと間違えてワインを飲んでしまったようなのだ。

一気に飲み干してたけど……大丈夫なのか？

「シシリー大丈夫？」

「ふええ？　なにがれすかあ？」

早っ！

一杯で酔っちゃったのか！？

「い、いや。それお酒……」

「にやー、これおいしいれすう」

そう言って、別のグラスを探し出すシシリー。

「あー、あったあ」

そして、お目当てのワインを見つけ、再度飲み干す。

「ちよ、ちよっとシシリー。あなた、そんなに呑んで大丈夫なの？」

その様子を心配したセシリアさんが声をかけるが……。

「だあいじょうぶれすよお、ぜんぜんよつれましえんからあ」

いや！　へべれけに酔っ払ってんじゃない！

今までお酒を呑んだところを見たことがなかったけど、こんなに弱いとは……。

「シシリー、もうその辺でやめとこう？」

俺は、まだ呑もうとするシシリーの手からワイングラスを奪い取り、お酒を呑むのを

やめさせようとしたのだが……。

「むう……あーシンくんだあ」

「ちよっ！　シシリー！？」

グラスを取り上げられて不機嫌そうな顔をしたのも束の間、俺の顔を見るなりしなだれかかってきた。

ちよ、シシリーの家族がいる前でこれはマズイって！

「にゅふふーシンくうん」

「マ、マズイって！」

「えー？」

しなだれかかってくるだけじゃなくて、俺の胸に顔を擦り付けてくる。

その行為は超絶可愛いんだけど、皆が見てるよ！

「あらあら、そんなに酔っ払っちゃって。シン君、申し訳ないんだけど、シシリーを寝かしつけてきてくれないかしら？」

「お、俺がですか！？」

酔っ払ってしまったシシリーを見かねたのか、アイリーンさんがシシリーを寝かしつけてくれるように頼んできた。

それはいいけど、何故に俺？

「ここにいる男は、中年にモヤシでしょ？ シン君にしか頼めないのよ」

中年にモヤシって……。

そう言われたセシルさんとロイスさんは、ガックリと肩を落としている。

セシルさんは全然中年には見えないけど、一番上の子供はもう二十歳を超えている。

ロイスさんは、言うほどモヤシではないけど、やっぱり文系の人で体力には自信がなさそう。

しょうがない、ここはアイリーンさんの言う通り俺が連れていくしかないか。

「ほらシシリー。部屋に行こう？」

「むう」

部屋に行こうと促した俺に対してご不満な様子のシシリー。

なんだ？

「だっこ」

「え？」

「だっこしてください」

マジか！？

皆の見てる前で抱っこ！？

つまりそれは……お姫様抱っこしていけということか！？

高い。

それはハードルが高えよシシリー！

「むう」

いつまでも抱っこしない俺にご不満なシシリー。

そして、興味津々でこちらを見ているクロード家の皆さん。

なんて苦行だこれ！

「シン君、お願いね？」

トドメとばかりにアイリーンさんからのお願い。

絶対この状況を楽しんでいるよこの人。

「はあ……じゃあ、いくよシシリー」

「はーい」

やる気を見せた俺に、満面の笑みで応えるシシリー。

そして、シシリーを抱きかかえると……。

「えへへ〜シンくーん」

「わ！ ちょっとシシリー！？」

「にゅふふ」

抱きかかえると同時に、俺にしがみついてくるシシリー。

ヤバイってこれ！

シシリーの柔らかさといい匂いであんなにかんたてしまいそうだ！

それでも、なんとか理性を総動員して劣情を抑え込んだ俺は、気になって周りの様子を見てみる。

するとそこには、楽しそうにこちらを見ているアイリーンさんと、頬を染めながらもバツチリこちらを見ているセシリアさんとシルビアさんがいた。

セシルさんとロイスさんは肩を落として俯いたままだ。

しょうがない、皆の視線は気になるけどこのまま行くか。

そして、俺の理性を削り取ろうとしてくるシシリーをなんとか部屋まで連れていく。

「シシリーの部屋ってどこ？」

「あーここれすう」

シシリーがそう言って指し示した部屋の扉を開けて中に入った。

そういえば、シシリーの部屋に入るのって初めてだな。

初めて入った感想としては、シンプルなシシリーらしい部屋だなということだ。

あまりファンシーな物は置いていないけど、可愛い机とベッド。

そしてソファ―セットが置いてある。

ベッドのそばまで来た俺は、しがみついてくるシシリーをなんとかベッドにおろそうとするが……。

「ほらシシリー、ベッドに横になって」

「やああ」

さらにしがみついてきた。

「ちよっ、シシリー危な……」

「きやうん！」

ベッドにおろそうとしたところで急にしがみつかれたものだから、俺はバランスを崩してベッドにシシリーごと倒れ込んでしまった。

「ゴ、ゴメン！」

シシリーを押しつぶしてしまった俺は、慌てて起き上がろうとするが、それでもシシリーは俺を離してくれなかった

「シシリー？」

「えへへ〜シンくんがいる〜」

ヤバイ。

ベッドの上で俺にしがみつき、心底嬉しそうな顔をするシシリーに、俺は愛おしさが抑えられない。

「シンくん……」

そして潤んだ眼で俺を見たシシリーは、そっと瞳を閉じる。

その行為に、俺の理性の糸が簡単に切れるのを感じた。

「シシリー……」

そして、目を閉じるシシリーに顔を近付けていくと……。

「すー、すー」

「あ、あれ？」

寝息が聞こえてきた。

さっき目を閉じたのは、キス待ちじゃなくて単に寝ちゃったからか！

あつぶねえ！

思わず、クロード家の皆さんがいるのに最後まで行っちゃうところだった！

もう一度体を起こすと、今度は簡単にシシリーの腕は離れた。

本当に寝ちゃったんだな……。

でも良かった。

酔った勢いで初めてとか、シシリーも嫌だろうしな。

でも、待てよ。

なんでこんなに酔っ払ったんだ？

確か、俺が渡した異物排除の付与をしたペンダントにはアルコールも過剰に摂取しない効果があつたはずだ。

効かなかったのか？

そう思つてふとシシリーの机の上を見た俺は、すぐに納得した。

「ああ、なるほどね」

そこには、俺が付与をしたペンダントが置いてあつた。

あれは、元々食事に毒物などが混入されていた場合に備えて渡したものだ。

シシリーは家にいる時、あれを付けていないんだろう。

そんな備えをする必要がないから。

少しでも、そんな物を付けているところを見せたくなかったんだろうな。

そんなシシリーの気持ちに気付いてホッコリしていると、シシリーがむにやむにやと寝言を言った。

「しんくん……だいすき……」

シシリー……夢でまで俺のこと思ってくれているのか。

そう思うと、またしてもシシリーに対する愛おしい気持ちが増えてきた。

「おやすみ、シシリー」

シシリーのおでこに、お休みのキスをした俺は、そのまま部屋を出ていった。

「で？ 皆さん、なにやってるんですか？」

部屋の前で聞き耳を立てていた女性陣に声をかけながら。

「あら、娘がちゃんと夫婦の営みが出来たのか確認してただけよ？」

「そんなことしませんから！」

「ええ？ シン君は私に孫の顔を見せてくれないの？」

「そのうち見せますけど！ 今はしないですから！」

「あら、それなら安心だわ」

ん？

あれ？

俺、アイリーンさんのペースにはまって何かとんでもないこと言わなかったか？

「シシリーが……私達より先に大人に……」

「由々しき事態ですわ、お姉様」

もお！ この女性陣、なんとかしてくれ！！

ちなみに、翌日お酒を呑んで以降の記憶が無くなっていったシシリーは、アイリーンさんから事細かに状況を説明され、一日俺の顔をまともに見てくれなかった。

……そこは誤魔化しましょうよ。

（おわり）